

“トリレンマ” 克服の途を求めて

若谷佳史

古代ギリシャの哲学者ヘラクレイトスは「万物は流転する」といった。そして、世界は「変化することによって安息している」とも。その意味は、あらゆる事物は、互いに関連し、対立し、せめぎあい、そして変化し、発展し、また巡り帰る、というプロセスを辿りながら、全体としてバランスを保つ。つまり、世界は変化を通じて統一と秩序を保つのだ、ということのようである。

なぜここでこうも古い言葉を引き合いに出したかであるが、それは世の中で“トリレンマ”という言葉がしばしば使われるようになった一方で、トリレンマの厳密な定義はどうなっているのか、トリレンマの構造はきちんと捉えられているのか、トリレンマにそもそも解決策はあるのか、等々という声があり、それに弁明しておきたいからである。

アリストテレス以来発展してきた形式論理学では、トリレンマは三刀論法と訳される一種の三段論法であり、厳密に定義されている。これはディレンマ（両刀論法）を複雑にした推論型式で、さらに複雑にしたテトラレンマ（四刀論法）とか、理屈上ではポリレンマ（多刀論法）というものまである。そして通常は、論争の相手を説き伏せ、あるいは窮地に追い込むために、導かれる結論がいずれであって相手にとっては望ましくない場合の論法として好んで使われてきた。

そこから普通の意味として、いくつかの選択肢がある場合、そのどれを選んでも結果が望ましくない状態を表すようになったようである。選択肢が2つのときがディレンマで、3つのときはトリレンマ、そして4つならばテトラレンマである。

さて、人類の危機として警鐘を鳴らしている“トリレンマ”は、経済の発展、資源・エネルギーの確保、環境の保全という、人類が達成すべき3つの目標が、実は互いに複雑に関連し、ときには相互に対立し、その3目標を同時に達成することが極めて困難である問題ということから、こう呼んでいる。

ご存じのように、このトリレンマに関する書物はこれまでに十冊以上まとめられている。その中で「トリレンマとは」や「トリレンマの構造は」という箇所は、私の調べた限りでも重複を省くと十箇所以上にのぼる。ところがその一つ一つは微妙にニュアンスの異なる表現になっている。実は、このことが先にあげたトリレンマという言葉に対する疑問なり混乱に繋がっているのではないかと推測する。

わたしたちは“トリレンマ”を、いずれにしても望ましい結果が起こりそうにない状態、という普通の意味で使っている。もちろん形式論理学の問題として議論しているのではない。したがって厳密に論理的な定義をすることにはほとんど意味がない。また、起こりうる事象の全体像を詳細につかんだ上で明確なトリレンマの構造を示すこともしていない。トリレンマの解決策にしても、万能薬が見つかる保障はないと考えている。

トリレンマを提起したのは、日常の慌ただしい生活のなかでは気づきにくい、あるいは、気づいていても真っ正面からは向かい合いたくない問題として、確かに“トリレンマ”が存在し、それは思いもよらない速さでわたしたちに忍び寄ってきていることを考えて欲しい、そして一緒にその克服に向けた行動を進めよう、と訴えたいからである。

冒頭にあげたヘラクレイトスの言に因んでいえば、今は、経済発展、資源・エネルギーの確保、環境の保全の3つの目標が、互いに対立し、せめぎあうトリレンマの状態にある。そうであっても、トリレンマを克服するためには、新しい変化の途を探し、新しい生活や社会、産業、技術、価値観にまで発展させること。言い換えれば、高い次元に発想を変え、価値観を変えること。それによって、再び3つの目標がバランスを保った、持続可能な地球文明にまた巡り帰る。こういったプロセスを見いださなければならない、ということである。

振り返ると、“トリレンマ”の言葉がはじめて使われたのは、新世紀の幕開けまでに丁度10年を残す1991年。世界は、冷戦構造の終焉という世界史的な大変化を経て、新しい秩序の構築が始まろうとする転換期にあった。当時、新しく電中研の理事長に就任した依田直 現顧問は、地球規模で急速に進行する大きな危機すなわち“トリレンマ”に注目し、これに挑戦することが、わたしたち現代人に与えられた課題であるとした。そして、トリレンマ克服に向けた処方箋を、内外の有識者の協力を得つつ探ろうとして設置したのが、有識者会議（通称、トリレンマ会議。現在の委員会構成は近藤次郎氏ほか33名）である。

それから8年が経過した。第1フェーズ（1992～96年）では、21世紀のパラダイムの模索、省エネ・省資源の可能性、食糧増産の可能性、先端科学技術と情報メディアの役割

を検討し、国内外に対してトリレンマ問題群の提起を行った。引き続き、第2フェーズ（1996～99年）では、アジア地域のトリレンマ問題を中心に、経済社会構造との係わり、対処における「環境文化」の重要性、エネルギー消費からみた21世紀社会の提案（4-2-1kW社会）など、今日的視点から有意とされる提言をとりまとめた。

いま1999年、21世紀への足音が日増しに大きく響くなか、第3フェーズの活動を開始する。これまでの活動を通じ、世界の各国・各地域が置かれている立場や状況によって、貧富格差、途上国の都市化、教育・医療などの社会基盤整備、環境倫理と市場倫理の相克、異文化交流・理解のあり方等々、それぞれが抱えている問題は極めて大きく異なることが浮かび上がった。

これ受け、先進国、途上国、最貧国それぞれのトリレンマ克服に一步でも近づきうる処方箋と、先進国と最貧国、途上国との相互関係の中に存在するトリレンマ克服に関する先進国の役割などをまとめていきたい。

また、これまでの活動を広く市民の方々に受けとめて戴くために、過去7回を数えるトリレンマシンポジウムを引き続き開催するとともに、ホームページや書籍などを通じて、国内外に情報発信することにも力をいれたい。

（わかたに よしふみ
電力中央研究所 経済社会研究所
有識者会議推進室）